

最新事情

学び続ける力を養い
社会で活躍できる人材に育て、送り出す

目白大学短期大学部

(東京都新宿区)

目白学園は大正12年に、新宿区の目白台地に創設した学園である。同学園の教育目標は「育てて送り出す」。短期大学部では、社会人基礎力の育成の一つとして秘書検定やサービスマスター検定などのビジネス系検定を取り入れ、指導している。短期大学部でのビジネス系検定の指導を中心に、同学園の教育について伺った。



目白学園新宿キャンパス。
短期大学部は昭和39年に、目白学園女子短期大学として創立した

油谷純子短期大学部学長



間違ってもよいという 雰囲気づくりを心掛ける

新宿区にある目白学園は、緑に囲まれた落ち着いたところのある学園である。現在この新宿キャンパスには、中学、高校、短期大学、大学の四つの教育機関があり、約7000名の生徒、学生が通っている。建学の精神は「主・師・親」。それ

ぞれの文字は、社会への貢献、師と共にひたむきに学ぶ姿勢、家族をはじめ自分を支えてくれる人々への感謝を表している。この三つを理

解し実践することで、社会人として自立（自律）した人生を送ってほしいという願いが込められている。これを実現するため、同学園では「育てて送り出す」を教育目標に掲げ、きめ細かい指導を行っている。学生をどのように育て送り出すのだろうか。短期大学部の油谷純子学長はこう話す。

「とりわけ短期大学部では、2年間で次の三つの力を身に付けてほしいと考え、指導しています。一つ目は『学び続ける力』。二つ目は『実践する力』。三つ目は『社会に役立てる力』。まずは、土台となる学び続ける力をしっかり身に付けさせることを目標にしています」。

これらの意識付けとして、大学と短期大学部の初年次を対象に「ベーシックセミナー」を行っている。この授業では「大学生活の基礎」や「情報収集と整理」「コミュニケーション技術」など段階を追って指導している。これと同時に短期大学部では、働く上で必要になるマナーや接遇の習得にも力を入れており、「社会人とマナー」を全学科必修科目として設置している。

「社会人とマナー」は、誰にでも通用するマナーの習得を目的としており、サービスマスター検定2級と準1級の内容を取り入れ指導している。昨年度は140名ほどが受験した。

2級の指導については知識の習得だけでなく、自分で考える力や伝える力を付けられるような授業を心掛けていくという。生活科学科の

常松玲子教授。「サービス接客検定2級の合格証をある学生に渡したら、うれしそうに机に置いて眺めていました。学ぶ意欲を高めてほしいですね」と話す



(右から)小島美紀さんと片野玲子さん

常松玲子教授は、学生の特徴についてこう話す。「共通しているのは、間違うことに対して恥じる意識が強いことと、周りと同じ意見だと安心することです。しかし社会では、自分で考えて行動できる人材や、失敗にめげない打たれ強い人材が求められています。ですから授業ではまず、少人数のチームを作って話し合わせ、間違っても恥ずかしくないという雰囲気づくりを意識しています」。

準1級については、ロールプレイングの練習に重点を置いて指導しているそうだ。お辞儀やあいさつの仕方などの基本的な所作から、実際に出题されるパネル問題まで学生同士で何度も練習をさせているという。常松氏は「このような練習を通して、引っ込み思案な性格を変え、笑顔やあいさつの大切さに気付いてくれれば」と期待する。

印象がまるで違います。結局はそのような人が先輩にかわいがられ、育ててもらえる。社会を生き抜く力をこの授業で養ってほしいですね(常松氏)。

学生の反応はどうだろう。生活科学科の小島美紀さんと片野玲子さんは「コミュニケーションの基本を学べた」と口をそろえる。小島さんは「アパレル業で接客のアルバイトをしているが、サービス接客検定の学習後、「洋服を薦めるときは『誰にでも似合う』という

ニュアンスで伝えるのではなく、お客さまに合わせた声掛けを心掛けるようになった」と変化を語る。片野さんは「雑貨屋でアルバイトをしています。言葉遣いに気を付けるようになりました。年配のお客さまも多いので、その点ではコミュニケーションがよりスムーズになったと思います」と学びを生かしているようだ。

ビジネスの場面は学生にとって、未知の世界

選択科目の「秘書学概論」「秘書実務」では秘書検定2級と準1級を、「ビジネス文書実務」ではビジネス文書検定3級を導入している。「秘書学概論」「秘書実務」で秘書検定を導入したのは昨年のことである。その理由について、ビジネス社会学科の神山直子准教授は次のように話す。

「会社にはどのような仕事があるかについて



案内の演習



秘書学概論などの授業以外でも、ビジネスマナーの意識付けをしている。写真はフレッシュマンセミナー「ビジネスかるたづくり」

理解し、さらにビジネス的な考え方を知ること、社会に出るためのベースを作ろうと導入しました。多くの学生はアルバイトをしています。そこで触れているのはビジネスの一部にすぎません。会社にはどのような役割があるかを始め、事務系の仕事に関することについては未知の世界。これらを知るだけでも、学生の社会に対する意識は変わってきます」。

神山氏が話す通り、学生たちはビジネス用語を知らないため、テキストに描かれているシーンが理解できないことが多いという。「授業では基本的なマナーだけでなく一般常識やビジネス用語なども根気強く指導していく必要があります(神山氏)。

ビジネス社会学科2年の奈良沙織さんと菅原妃眞理さんは、1年のときに秘書検定2級を受験した。奈良さんは、就職活動で役立てたいという思いから挑戦した。「学習では特に手紙

神山直子准教授



上岡史郎准教授

(右から) 奈良沙織さんと
菅原妃眞理さん



の書き方を学びました。履歴書だけでなく、就職した後も実践したい」と抱負を話してくれました。

菅原さんは「電話を取り次ぐ際は、時と場合によっていろいろな方法があることを知りました。社会に出る前に学べてよかった」と話す。

神山氏は、「秘書検定の受験は、学んだことを振り返り、知識を深めるのに大変効果がある」と話し、こう続ける。「努力した結果が実ると、それは自信につながります。2級に合格した学生は準1級にも挑戦したいと意欲的な様

子がうかがえます。今後は学んだことが、社会でどう生きるかについても意識が向くよう、指導をもっと充実していきたいですね」。

自分の力で合格をつかみ 学び続ける力を養う

一方、ビジネス文書検定を導入したのは5年前である。インターシップや就職活動の際に大きな効果を発揮しており、卒業生からも「学べてよかった」という声が挙がっている。実務に生かせる資格として学生に人気が高いが、「検定受験に期待することはもう一つある」とビジネス社会学科の上岡史郎准教授は話す。

「AO入試で入ってきた学生が多いため、受験勉強で苦労したという学生は意外に少ないのが現状です。検定に挑戦することで成功体験を積み重ね、自信を付けることを期待しています。これが勉強する意欲につながるとは思います」。

短期大学部でのビジネス系検定の取り組みは、大学にも広まりつつある。特に心理カウンセリング学科の学生の間で、秘書検定2級以上と、日本語検定などの検定に合格すると得られる「秘書実務士」(秘書サービスマネジメント教育学会認定資格)への注目が高まっているそうだ。教務部資格支援課の加藤公生主任は注目されている理由についてこう説明する。

「心理カウンセリング学科では卒業後を見据え、五つ以上の資格を取ることを目標にしてい



(右から) 佐藤尚子資格支援課長、
鎌田京子教務部長、加藤公生資格支援課主任

ます。専門的な資格はもちろんです。社会で働くとなれば、基本的なマナーやオフィス実務なども知識として持っていた方がよい。資格支援課では、必要性も含めてアナウンスしたり、奨励金制度を充実させるなど、学生が受けやすい環境づくりをしています」。

昨年度は大学で13名の学生が秘書実務士を取得した。今年度の案内はこれから始まる予定だが、すでに3名の学生が秘書実務士を取りたいと相談に来ているという。佐藤尚子課長は期待を込めて、最後にこう話してくれた。

「大学では専門科目に専念することが一番に求められますが、余裕があればどんどん資格にも挑戦してほしいですね。反対に短大は、入学時からすでに社会を意識した教育が行われています。積極的に資格に挑戦し、立派に社会に巣立って行ってほしいと思っています」。

「育てて送り出す」という目標を教職員、学生が一体となって実践する目白学園。今後もその取り組みは、粘り強く続く。